

2017年度 活動実績アピール方式 講評

立命館アジア太平洋大学

2017年度活動実績アピール方式は、出願要件の異なる2つのカテゴリーを設けて実施しました。

カテゴリーA 英語能力・留学経験アピール

出願資格：大学入学資格に加え、下記①～③のいずれかに該当する者。

- ① TOEFL iBT 42点相当以上(※)の取得者
- ② 国際バカロレアのディプロマを英語で取得（取得見込）の者
- ③ 外国における高校相当の課程で、正規の教育制度に基づき通算3ヵ月以上の教育を受けた者

(※) TOEFL iBT42相当と認められるスコア・級位

TOEIC(L&R) 550 / TOEIC(L&R, S&W) 790 / IELTS(Academic Module) 4.0 / 実用英語技能検定 2級 /
TEAP (4技能) 226 / TEAP (2技能) 108 / GTEC-CBT 1000 / GTEC for STUDENTS 675 /
TOEFL Junior Comprehensive 322 / TOEFL Junior Standard 745 / ケンブリッジ英検 140

カテゴリーB 文化・スポーツ等アピール

出願資格：中学校卒業から出願までの諸活動において優れた実績を持つ者で、高校の評定平均値が5段階で3.5以上。

■第1次選考（書類審査）

1. 選考内容と評価ポイント

出願時に提出された「学士課程入学願書」、「調査書」、「志望理由書」、「ショートエッセイ」、「活動実績報告書」等に基づく審査の結果を総合して第1次選考合格者を決定しました。

審査においては、出願カテゴリーを問わず、「活動実績報告書」に記入された中学校卒業以降の諸活動における実績・成果や、英語資格試験等のスコア・級位の取得水準等を重視し、それらをあわせて評価しました。したがって、例えば、英語資格等の取得に加えて、高校時の部活動や生徒会活動等における実績・成果をあわせてアピールした出願者は、それらの水準にもよりますが、どちらか一方のみをアピールした者に比べて高い評価が与えられました。

また、両カテゴリーに共通して、「志望理由書」では自らの将来像と、本学の特徴や志望学部の学修領域とを適切に結びつけた上、入学後の学修計画を展開したものを高く評価しました。また、「ショートエッセイ」については、他の提出書類では捉えることのできない、教科学習以外の能力や経験を示すものとして参照しました。

2. 第1次選考 講評

カテゴリーAの出願者は、その約5割がカテゴリーA 出願資格①で定める英語力水準をさらに上回るスコア・級位を取得しており、その約3割は本学の英語基準入学の出願要件であるTOEFL iBT 61相当以上を超えるスコア・級位の取得者でした。また、約6割が海外学修経験者で、そのほとんどは高校時に1学年相当以上の留学経験を持つ者でしたが、留学先での学習の

成果が認められない、あるいは現地での学習の達成度が劣ると判断される場合には、低い評価となりました。

カテゴリーB出願者の半数以上から、高校の部活動の成果として各種競技会、コンクール、コンテスト等の結果が提出され、その多くは都道府県レベル上位の水準を上回るものでした。その他には、生徒会活動や国内外でのボランティア活動等の成果、論文やスピーチ、ディベート等のコンテストでの優秀な成績、中国語、韓国語、スペイン語など英語以外の言語能力試験における成果、全国規模で実施される高校生対象の人材育成プログラム等への参加実績などが提出されました。また、カテゴリーBにおいても英語資格等を有する出願者が過半数を占めました。

出願カテゴリーにかかわらず、提出された活動実績・成果や英語資格等の水準に加えて、高校等での学習の達成度、志望理由書等にもとづく審査を行い、それらの結果を総合して第1次選考合格者を決定しました。

■第2次選考（面接）

1. 選考内容と評価ポイント

第1次選考合格者を対象に個人面接（受験者1名に対し複数名の面接者による）を実施しました。時間は15分程度で、入学後の学修や正課外活動を含む学生生活への意欲や適性を中心に、質疑に対する応答の的確さや論理展開力などを評価しました。

2. 第2次選考 講評

大学入学後の学修や学生生活の展望を力強くアピールする受験者が多数を占め、本学の多文化・多言語の環境、多様性のある学生構成などを積極的に活用する強い意欲が感じられました。

しかし一方で、志望学部の学修に対する興味・関心や、入学後の学修計画について具体的に述べられない受験者や、これまでの学習や経験を大学入学後にどのように発展させていくかを的確に説明できない受験者などが散見されました。

また、志望動機や入学後の展望などに関する一般的な質問に対して、的確に答えられるようあらかじめ回答を準備してきた受験者が多数でした。準備して面接に臨むことは大切なことであり、そのこと自体が評価を低めることはありませんが、準備してきたままの簡潔さを欠く回答や、具体性を欠く回答などは低い評価となりました。

質疑の中には、これまでに取り組んできた活動や取得資格などの実績について質問し、それに対する受験者自身の考えを述べさせる場合があり、その考えに対してさらに質疑応答を繰り返すなどして、受験者の自ら思考する力や、的確に説明する力などを評価しました。また、自ら考えて計画を立案し、達成した経験を持つ受験生や、様々なコミュニティに関わるなどして他者と交わる機会を積極的に得ている受験者は、高い評価を得る者もいました。ただし、面接においては、実績の優劣を問うことではなく、活動を通じた成長と経験を入学後の学びにどのように繋げるのかを重視しました。

以上